

橋爪 烈

『ブワイフ朝の政権構造——イスラーム王朝の支配の正当性と権力基盤』

慶應義塾大学出版会、2016年



荒井 悠太

早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程

本書は2009年度に東京大学に提出された博士論文「ブワイフ朝の政権構造——支配者一族の紐帯とダイラム」¹⁾に、その後の研究成果を加えて刊行されたものである。著者である橋爪烈氏は現在、千葉科学大学で教鞭を執っている。『王冠の書』にみるアドゥド・アッダウラの王統観(2011年)をはじめとするブワイフ朝史に関する業績に加えて『時代の鏡』諸写本研究序説(2006年)『イブン・ハルドゥーン自伝』写本についての一試論(2010年)など、写本研究においても優れた業績を挙げてきた氏の初の単著が本書である。ブワイフ朝を扱った専著は邦語文献としては初であり、氏自身語っているように「空前絶後の本」といえるであろう²⁾。

ブワイフ朝はアッバース朝カリフの傀儡化や権威の利用、イクター制の導入など、後続の王朝によって引き継がれていく統治手法を実践した初の王朝であり、その歴史的意義が大であることは疑いない。

一方で、ブワイフ朝はファールス、ジバル、イラクの三地域にそれぞれの政権が並立するという独特の体制を取った王朝でもあった。橋爪氏は本書において、まずこの三政権に関する叙述史料の偏在と、それに起因する先行研究のイラク政権偏重を指摘する。氏は、ブワイフ朝史の主だった先行研究(Kabir, Busse, Donohue)を紹介して先行研究の動向を提示したうえで、これらがムイッズ・アッダウラ期にみられるイラク政権の「ダイラム排除」かつ「アトラク重用」という傾向をブワイフ朝全体の傾向へと拡大していることに

疑義を呈す。そして、先行研究中では等閑視されてきたファールス及びジバルの二政権におけるダイラムの重要性を示すことによって反証を行う。ブワイフ朝におけるダイラムの存在意義を示し、三政権の性格を相対化することこそ、本書の根底にあるテーマであるといえる。

本書のもう一つのテーマは、三政権並立という独特の体制を可能たらしめた論理の解明である。氏はブワイフ朝第一世代に属するイマード・アッダウラ、ルクン・アッダウラ、ムイッズ・アッダウラの三君主が個々の独立性をもちつつも、一族の主導権ないし家長の権威であるリアーサ(ri'asa)の意識によるまとまりを有した連合体制であったとする。しかし第二世代においてはリアーサを巡り一族間の争いが生じ、アドゥド・アッダウラによる統一期を経て、彼の死後にはブワイフ一族の支持集団の利害によって結びついた緩やかな、あるいは消極的なまとまりへと変化したとする。従来意識されることの少なかった三政権の相互関係を厳密な史料読解によって描き出し、その時間的な変化をも捉える内容となっている。以下、本書の内容をみてゆこう。

本書の構成は以下の通りである。

序論

第1部 ブワイフ朝の政権構造と支持基盤——勃興期からアドゥド・アッダウラの死まで

第1章 ブワイフ朝君主の主導権争いと一族の紐帯

第2章 ブワイフ朝初期の「ダイラム」

第3章	ブワイフ朝ジバル政権の対外政策
第4章	『王冠の書』にみるアドゥド・アッダウラの王統観
第2部	アドゥド・アッダウラの死後のブワイフ朝諸政権
第5章	アドゥド・アッダウラの後継位を巡る争い
第6章	第二次ファールス政権とダイラム
第7章	バハー・アッダウラとダイラム
第8章	後ジバル政権の成立
結論	

本書は二部構成を取り、アドゥド・アッダウラの死による統一政権の崩壊をその境としている。まず序論において、イラク地方への偏りという研究史上の問題点が指摘され、ブワイフ朝の連合政権の性格の内実と従来捨象されてきたダイラム集団の位置付けを再検討するという本書の基本的枠組みが示される。

第1章では、アッバース朝カリフの任命によるアミール（総督）権（imāra）の性格、ブワイフ家第一世代の三政権の独立性そして独立性を維持しつつ連合を形成することを可能にしたリアーサの性格が示される。さらに、第二世代におけるリアーサを巡る抗争とアドゥド・アッダウラによる統一を経て、アドゥド・アッダウラが第一世代の大アミールとは異なる「ムルク」の保有者すなわちマリクとして、アッバース朝カリフ権を自己の権威として取り込むことを意図していたと論じる。

第2章では、第一世代のイラク・ジバル両政権におけるダイラムの位置付けが比較され、両政権におけるダイラムの扱いの相違が示される。この検討結果を根拠として氏は、先行研究においてブワイフ朝全体の傾向とされてきた「アトラク重用」が、実際にはイラク政権に限定されるものであり、ジバル政権においては依然としてダイラムの重要性が保たれていたと論じる。ダイラムの反乱が頻発していた事実については、ブワイフ家が「同輩中の第一人者」に過ぎず、その不安定な地位ゆえにダイラム集団内でのリアーサをめぐる争いが生じていたと説明される。

第3章では従来顧みられることのなかったジバル政権の東方政策、すなわち対サーマーン朝政策が論じられる。強大なサーマーン朝の脅威を減じるために、初期のブワイフ朝が軍事・外交の両面において様々な策を駆使し、またイラク政権とも連携してアッバース朝カリフの権威を有効に利用していたことが示される。

第4章では、『王冠の書』にみられる系譜に基づくアドゥド・アッダウラの王統観と『王冠の書』執筆当時の政治状況が併せて論じられる。アドゥド・アッダウラは『王冠の書』を編纂させることによって、ブワイフ家とダイラム・ジール有力家系との間に系譜上の繋がりがあることを主張した。彼のこうした主張には、麾下のダイラムからの支持を獲得し、ジールの有力家系に連なるズィヤール朝君主カーブースとの抗争を優位に運ぶ意図があったとする。

第5章では、シャラフ・アッダウラとサムサーム・アッダウラによるアドゥド・アッダウラ死後の後継争いの経過が検討される。アドゥド・アッダウラの宦官シュクル、宰相イブン・サアダーンらアドゥド・アッダウラの旧臣によるサムサーム・アッダウラ擁立の可能性、その後の反乱計画によるサムサーム・アッダウラ政権の内実の変化、シャラフ・アッダウラのイラク侵攻の背景から、両者の抗争がブワイフ家のリアーサの論理ではなく、両者の支持集団の利害に左右されるものであったことが示される。

第6章では、サムサーム・アッダウラによる第二次ファールス政権の構造が検討される。シャラフ・アッダウラ政権を支えた有力者達の構成、出自、活動が検討され、ここでもアトラク有力者の少なさが指摘される。一方でダイラムについては、その身分秩序や地域ごとのまとまりがあったことが分かり、第二次ファールス政権の主な担い手はダイラムであったことが史料から示される。これらのダイラム集団はイマード・アッダウラ期以降ファールスに基盤を有していた人々であり、彼らの支持が同政権の命運を左右したと論じられる。

続く第7章でもバハー・アッダウラとダイラムの関係に焦点が置かれる。バハー・アッダウラは

先行研究においては「アトラク重視」の政権であると論じられてきたが、彼の政権構造とファールス移転政策の実態の検討を通じて、バハー・アッダウラ政権下にもまた多数のダイラムが存在し、彼の政権の基盤となっていたと論じる。ファールス移転の要因としては同地の地理的・経済的重要性が示唆されているが、最終的な結論は保留されている。

第8章では、ジバルの君主ムアイド・アッダウラの死後、アドウド・アッダウラの弟ファフル・アッダウラの後継によって成立した後ジバル政権が、アドウド・アッダウラの息子達による後継争いとは一線を画し、独立の政権として成立してゆく背景が分析される。ファフル・アッダウラは元々サーマーン朝支配下のホラーサーンで亡命生活を送っていた人物であるにも関わらずジバル政権の後継者として擁立されたが、この継承にはムアイド・アッダウラの旧臣の意向や、彼がダイラム君侯の系譜に連なる人物であった点が影響していた。こうした事実から、著者は後ジバル政権がブワイフ家の論理ではなく、ムアイド・アッダウラの旧臣の利害によって成立したと論じ、ブワイフ家の継承のあり方の変容を示す例であるとする。

最後に結論として、冒頭で言及したような先行研究の修正に加え、アッバース朝カリフやシア派との関わりについても若干の展望が示される。また後ジバル政権の性格を受けて、アドウド・アッダウラ死後の諸政権を「ブワイフ朝」という枠組みで括ることの妥当性についても疑問が提起される。

以上みてきたように、本書はブワイフ朝の通史ではない。むしろ時系列に沿って事例研究を組み合わせることによって、ブワイフ朝諸政権の在り方を多面的に浮かび上がらせる構成になっている

といえる。事例の多くは先行研究における「ダイラム排除」、という論調に対して反証となるものであり、著者の主張には十分な説得力があるといえる。

また橋爪氏の手法の一つの特徴として、同時代史料への強いこだわりが本書からは伺える。本書の巻末には史料解題が付されているのであるが、とりわけ『時代の鏡』テキストに関しては、氏自身の論文「『時代の鏡』諸写本研究序説」での分析に基づき『時代の鏡要約』『時代の鏡抜粋』二種の諸写本を用いている。また『ヒラルル・サービーの歴史』等、部分的にしか残存しない同時代史料の逸文を後代の史料から抽出するなど、同時代人の証言に非常な注意が払われている。このように多数の写本を渉猟するには多大な労力を要したであろうことは想像に難くないが、著者のこのような姿勢こそが、先行研究の視野を狭めている史料的制約を克服し、新たな見解を提示することを可能たらしめたのであろう。

ただし、アトラク側の動向が伺えるような事例が本書ではほぼ取り上げられていない点には注意が必要である。すなわち本書は「ダイラム排除」に対する反証には成功しているが、それは必ずしも「アトラク重用」に対する反証に結び付かないのではないかと、との疑問は依然として残る。「高位のアトラク武将の名は史料中に見出せない」(p. 107) というように史料上の制約も示されているが、著者の結論はあくまでも政権間におけるアトラクとダイラムの「棲み分け」であり(pp. 339-340)、イラク政権におけるアトラクの意義とバハー・アッダウラ期以降の具体的な状況については本書では未検討である。バハー・アッダウラ期以降の同時代史料もまた限られているとのことではあるが(p. 344)、著者の今後の研究の進展に期待したい。

註

- 1 東京大学大学院人文社会系研究科・文学部博士論文データベース <http://www.l.utokyo.ac.jp/postgraduate/database/2009/679.html> (最終閲覧2017/8/31)
- 2 日本・アジアに関する教育研究ネットワーク「自著を語る」<https://asnet-utokyo.jp/publications/introduction/1270> (最終閲覧2017/8/31)